

おにろく
大工と鬼六はってん
発展 ②

大工と鬼六

(日本の昔話)

昔、流れの速い川があり、何度橋をかけても、すぐに流されてしまいました。村の人たちは、うでのよい大工にたのみました。

大工がこまっていると、川から鬼おにがあらわれました。

「おれが橋をかけてやろう。そのかわり、おまえの目玉をよこせ。」

次の日、りっぱな橋ができていました。目玉をとられたくない大工がたのむと、鬼おには言いました。

「おれの名前を当てたら、ゆるしてやろう。」

大工が山を歩いていると、子どもたちの歌が聞こえてきました。

「早く鬼六おにろく、目玉もってこい。」

次の日、大工が「鬼六おにろく。」とよぶと、鬼おには川の中へ消えていきました。

1 村の人たちが大工にたのんだのは、どうしてですか。

2 鬼おには、橋をかけるかわりに何をよこせと言いましたか。

大工の

3 鬼おには、どうすればゆるしてやると言いましたか。

ア お金をはらう。

イ 鬼おにの名前を当てる。

ウ もう一つ橋をかける。

4 大工が、鬼おにの名前を知ることができたのはどうしてですか。
